

歴史は、文明の成功と失敗の積み重なりといえる。旅をすると、その重層構造を目の当たりにすることがある。

今秋、トルコのイズミールから十ヶ海、マルマラ海沿いにイスタンブールまで、いくつかの歴史的遺産を巡った。青銅器時代のトロイ以来、5000年にもわたって次々と栄え、滅びていったアナトリア文明の移ろいにひたした。

エフェソス遺跡を散策していると、タイムマシンで往事に降り立ったような気分にかられる。紀元前六世紀にさかのぼって、この港町を訪れると、127本のイオニア式円柱をもつアルテミス神殿がそびえている。現代に戻ると、荒れた湿原に復元された柱が1本寂しく立っているだけだ。

紀元前34年、ローマ帝国の支配下に入ったエフェソスの街路を新婚のアントニウスとクレオパトラが散歩している。壮大な野外劇場のにぎわいをみていると、4年後に2人が自害して果てることは予期できない。

それから150年ほどたったエフェソス中心街には、1万2000巻のパピルス書を蔵する優美な図書館が建っている。面白いのは、図書館の真ん前に遊郭があること。「きょうは勉強しに行く」と家を出て、遊びに立ち寄った男どもがいたにちがいない。道路の傍らには、ハートや足形で遊女のいる方角を示す大理石(最古の広告?)が埋め込まれている。ローマ帝国の最盛期、このアジア州都にはローマ文明が咲き誇っていた。

イオニア人が植民したころ天然の良港だったエフェソスも、川が運んでくる土砂とともに歴史のなかに埋まっていく。ローマ帝国から千年たったオスマン帝国の時代には人影がまれになっていたらしい。百年続く近年の発掘で再び姿をみせた広大な遺跡を歩いていると、文明のはかなさに思いが至る。



物たちの領分に迫つたのを機に活動領域を広げているのだ。

砂漠化=いま地球上で1秒間に2000平方メートルほどの面積が砂漠化しているという。中国だけでも毎年、神奈川県を上回る土地が砂漠となり、その勢いは、高成長を謳歌する北京近郊まで迫っている。人口増加による過度の放牧や伐採が背後にある。

核拡散=20世紀の物理学と世界大戦が生み出した核兵器。この勝者の武器を文明への危機とみなした国際社会は1968年、核不拡散条約を成立させた。しかし、米ソなど核保有5カ国が条約で求められた「核軍縮への誠実な努力」を怠っているうちに、条約外のインドとパキスタンが核実験(イスラエルも保有の可能性)、今度は北朝鮮が暴発した。地球はなお「核抑止」という恐怖の神話の下にある。「核分裂は世界を一変した。私たちの思考様式を除いては」と語ったラインシュタイン博士は、戦争のない世界政府を希求していた。被爆国日本の政治家たちは、世界へ向けて思考変革を促す発信をしてみたい。

制度の足かせ=今日の社会を成功に導いてきた制度が、明日の社会を拓く足かせになつてはいないか。たとえば学校教育。人生初期の一定期間に一定の知識を画的に教え込もうとする管理システムは、学びの場の楽しさを奪い、知への探究心をなえさせる。情報としての知識なら、だれでも、どこでも、いつでも得られる「ユビキタス社会」にあつては、人生を通して楽しく学ぶための場こそが必要だ。それは、古代都市エフェソスのように歓楽街の図書館や博物館であつてもいい。多様な知性から新しい文明が生まれる。

## クジラ文明と共鳴しては

2007年春公開のドキュメンタリー映画「地球交響曲 ガイヤシンフォニー」第6番の試写を見て、人類を超えた地球文明

## 成功のなかに忍び寄る影

昔から文明を滅ぼしてきたものは、気候変動、環境悪化、病原体、自然災害、資源枯渇、それらが相まって起こる戦争や民族移動だった。ひるがえって、現代の文明社会を眺めると今日の成功の中にも、明日の失敗につながる要因が忍び寄っていることがわかる。人類の活動範囲が大きくなり、力強く立ち上ることで、地球規模の文明崩壊を招く危険性を秘める。

気候変動=私たちの祖先は、いくつかの氷河期を克服して文明を築いてきた。農業、動力など技術の果たした役割は大きい。ここへきて技術文明そのものが気候変動を招き、文明に脅威を与える可能性が出てきた。産業革命以来の化石燃料の消費で大気中の2酸化炭素の濃度を急激に変えているためだ。温暖化との関連が科学的にはつきりしないことを理由に、最大の消費国アメリカが国際的な取り組みに同調しない。世界中が同じ豊かさを求め続けたらどうなるのか。文明の危機管理が必要となってきた。

オゾンホール=危機管理といえば、地上の生命を太陽の紫外線から守っているオゾン層の破壊は、原因物質フロンが国際的規制によつて、かろうじてフレイキがかかった。しかし、世界気象機関によれば、南極上空のオゾンホールは2006年に最悪の事態になっていた。すでに放出されたフロンが大きな穴をあけているのだ。人工物質文明の大いなる負の遺産だ。

新興ウイルス=世界保健機関が天然痘絶滅を宣言したのは1980年。長らく人類を苦しめてきたウイルス感染症は克服されるかと思いきや、すでに新興ウイルスが頭をもたげている。81年に第1号患者が報告されたエイズ感染者は3950万人にのぼる。今世紀に入つても新型肺炎SARSや鳥インフルエンザの流行が世界を騒がせた。これらの病原ウイルスは、人類が登場する前から野生動物のなかにいたのだが、現代文明が動

(科学ジャーナリスト)

## 武部俊一

## 文明の成功体験を超えて

があるかもしれないと感じた。

このシリーズは、龍村仁監督が英国のジエームス・ラブロック博士のガイヤ理論(地球はひとつの生命体)に基づいて15年前から制作しているオムバス作品で、今回のテーマは、全ての存在は響き合っている。その1話で、米国の海洋生物学者のロジャー・ペイン博士が探ってきた「ザトウクジラの歌」に耳を傾ける。



ペイン博士によると、クジラたちは音での世界理解を通して独自の文明を持っているようだ。その「歌」の構造は、人間の「音楽」と似通ったところがあつたり、ソナタ形式があつたり、韻を踏んだりする。ひよとしたらクジラは人類よりはるかに先輩の音楽家かもしれない。「彼らは、人間が「知性」によつて進歩させてきた「技術文明」は全くもっていない。だとすれば、彼らは、その高い知的能力を何に使っているのか。それが、クジラたちに関する最大の謎であり、神秘的なのだ」と博士は語っている。

この秘密が解明され、クジラ文明と共鳴できれば、地球と調和する明日の文明が築けるのだろうか。のどかで美しい映像に、そんな希望がよぎった。



たけべしゅんいち:1938年、大阪市生まれ。1961年、東京大学教養学部教養学科(科学史・科学哲学)卒業。同年朝日新聞社に入り、社会部記者などを経て1969年から科学記者。1983~88年、科学部長。1988~99年、論説委員。1999~2000年、編集局顧問。2001年からフリージャーナリスト(日本科学技術ジャーナリスト会議会員)。科学・技術と社会との関わりに関心をもつ。興味の対象はモーツァルト、レオナルド、ゲーム、ET、ワイン。著書は『タイムマシン夢書房』『心のプリズム』など。